

Barbara Johnson: *A Life with Mary Shelley*

Stanford, California: Stanford University Press, 2014. 198pp.

細川美苗

本書はBarbara Johnsonの遺稿である‘Mary Shelley and Her Circle’を、彼女のその他のMary Shelleyに関する論文と共に友人らが一冊の本にまとめたものである。Cathy Caruthによる序文から始まり、Mary Wilson Carpenterがイントロダクションを書き、Judith Butlerが第一部のあとがきを、Shoshana Felmanが第二部のあとがきを書いている。Johnsonは、イエール大学でPaul de Manに師事し、Jacques Lacanなどを取り込みつつ脱構築を展開させたフェミニズム批評家として知られており、本書はJohnsonが死の際まで力を注いでいたMary Shelley研究を中心にその功績を整理したものである。

トラウマ理論を中心とした精神分析的立場から文学作品を研究しているCaruthは、Johnsonが「亡くなるほんの数週間前に書きあげた」(xi) 作品を含むこの本を編集することが、生死を超えて連鎖する循環を形成すると述べている。つまり、Johnsonが長く等閑視されていたMary Shelleyの小説に息を吹き込んだように、この本はJohnsonの仕事、つまり彼女の人生を蘇らせるということだ。以下で編者たちは各自の視点からJohnsonの生涯と思想を蘇生し、その中でMary Shelleyの再解釈にも踏み込んでいる。

ヴィクトリア朝女性作家研究者であるCarpenterは、Johnsonの博士論文以降の研究を概観している。Johnsonは1978年にイエール大学における‘Man and His Fictions: Narrative Forms’というコースでJean-Jacques Rousseauを扱っていたが、そのコースは80年になると性的に中立的な‘Narrative forms’という名称に変更になる。そこで彼女は*Frankenstein* (1818) をテキストとしてRousseauとの比較において講義した。ここで‘life’と‘writing’の関わりに興味を持ったJohnson

は、Mary Shelleyの*The Last Man* (1826) についての論文を書きあげる。この論文は黎明期にあったMary Shelley研究の先鞭をつけた。その後Johnsonはイエールの女性学プログラムの立ち上げに尽力し、女性作家へ関心を寄せ、イエール学派によって上梓された*Deconstruction and Criticism* (1979) の女性による女性作家版を企画していた。この企画は現実のものとはならなかったが、彼女の女性作家への関心は衰えなかった。本書に初収録されたJohnsonの‘Mary Shelley and Her Circle’は1995年にハーバード大学で同題にて行われたゼミナールをもとにしており、Carpenterは当時のJohnsonによる講義シラバスを収録している。

蛇足だが、本書に再掲された‘Gender Theory and the Yale School’で、Johnsonが*The Last Man*をMary Shelleyの最後の小説だと勘違いしていることをCarpenterが指摘している (xviii)。その指摘は正しいが、Johnsonの間違った記述が現れる頁数が間違っていた (実際は28頁)。Johnsonの勘違いは現在では驚くようなものであるが、彼女がいかに早期にMary Shelley研究に着手したのかということを示すものである。

本書の第一部にはJohnsonによる三つの論文が年代順に収録されている。冒頭の‘The Last Man’は彼女のMary Shelley研究の第一歩であった。二番目の論は*Frankenstein*に関する‘My Monster / My Self’であり、三番目は‘Gender Theory and the Yale School’である。第一論文の初出はフランス語であり英語で読めるようになったのは*The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein* (1993) への収録以降で、英語では三つの論文の中で最後に読むことができるようになった。

‘The Last Man’はフランス語での講演の後、‘Le dernier homme’として*Actes du colloque de Cerisy: Les fins de l’homme — à partir du travail de Jacques Derrida, 23 juillet-2 août 1980* (1980) に収録された。従来見過ごされてきた女性の書きものを再評価するものであるが、むしろDerridaとの関連で読まれるべき、脱構築批評の色合いが濃い論である。

この論文でJohnsonは、Mary Shelleyの『最後のひとり』を理想的人間、つまり西欧人男性の歴史の終焉であるとみなし、絶対的他者である疫病によりあらゆる事象が意味を失う物語を“the story of modern Western man torn between mourning and deconstruction”と位置づけている (12)。『最後のひとり』の主人

公は彼の社会の終わりを確信した時、未知の世界へ旅立つ。主人公がインド洋に浮かぶ島、つまりアジアを目指して出航することについてJohnsonは、意味の礎を失った（西欧）人間主義が他者との遭遇による際限ない誤読解の世界へ移行するのだと説明している。

フェミニスト批評の観点から本論をみた場合、最後のひとりとなる者が男性であることを問題視し、主人公の性別を中性的な単なる視点だとする指摘は評価できるが、小説の序における語り手の性別の曖昧性とからめて、性差についてもう少し踏み込んで論じて欲しかったと思う。その点で次の論文と比較すると、フェミニズムの視点は歴史の概念を脱構築した際にもたらされる副次的要素に留まっているといえる。

‘My Monster / My Self’は1982年にフェミニスト号（‘Cherchez La Femme: Feminist Critique / Feminist Text’）である *diacritics* 夏号に収録されたものである。これはMary Shelley以外の二人の女性による自伝と *Frankenstein* において否定的に表象される親子関係、または母・娘関係について論じている。そこでJohnsonは、文学の伝統においては女性の視点からの理想的な女性像が不在であるために女性の自己表象が不可能なのであり、それゆえ女性の自伝に自身または（母）親について否定的な表象もしくは抑圧としての非表象が生じるのだと指摘している。オイディプス神話と母親の持つ赤子遺棄願望との関連など神話アレゴリー解釈は難解に感じられるが、表象されなかった女の生き物を抑圧される女性の願望とみなすような解釈の先駆けといえるのではないか。

‘Gender Theory and the Yale School’は1984年に同タイトルのもとに開かれた学会での発表をもとにした論文であり、同年に *Genre* に収録された。Johnsonにとっては師に当たるde Manの逝去に伴い、その代理として引き受けた発表であった。男性作家しか眼中にないと思われているイェール学派において、四人の批評家、Harold Bloom, Geoffrey Hartman, Hillis Miller, de Manの論に意図せず表出する女性にまつわる言説を取り上げている。さらにJohnsonは自身の著書 *World of Difference* (1980) についても同様の解釈を施す。そこで同書が扱う作品が表面的には女性を排除しているものの、それでも女性性の痕跡を読みとることが可能であると示している。一見性差について何も語っていない言説

の中に潜在している女性性についての見解を分析することが、有効なフェミニズム批評となるということが理解できる。

Johnsonによる脱構築とフェミニズムの接合は功を奏して、ロマン主義時代における女性の書きものの再評価が進んだことは疑いようもない。しかし二項対立の不均衡を表面化させる試みは、性差のみならず階級や人種、性的マイノリティーという更なる社会的他者の概念を掘り起こし、それらの概念がどのような位置関係にあるのかという難問に突き当たることになる。また、そもそも女性とは誰なのかという問題も浮上した。

第一部のあとがきはジェンダー理論やクエア理論で知られるButlerによるものであり、Johnsonの*Frankenstein*論を現代の視点から読み直している。内容的に多岐にわたり複雑なJohnsonの論をジェンダーの視点から整理するパトラーらしい解説である。*Frankenstein*に登場する生き物を、人間（男）とそうでない者との識閲と位置づけ、既存のセクシュアリティや強制的異性愛とそこから派生する家族、社会の概念を脅かすものとみている。また、そのような社会を脱した新しい人間関係の可能性をほのめかしつつも、新しい社会も生き物が示すような破壊的衝動からは逃れられないだろうと締めくくっている。

第二部は‘Writing in the Face of Death: Johnson’s Last Work’と題されており、Johnsonが書いた‘Mary Shelley and Her Circle’が収録されている。それは、Mary Shelleyが*Frankenstein*創作に際して競った五人の作家についての書きものである。それらの作家は幽霊譚創作競争の夜に居合わせた三人、Percy Bysshe Shelley、Geroge Gordon Byronとその主治医であるJohn Polidoriと、William GodwinおよびMary Wollstonecraftである。タイトルはニューヨーク公立図書館にあるロマン派時代の原稿コレクションに付けられた‘Shelley and His Circle’というタイトルに対峙する形で付けられており、男性中心であるロマン主義作家研究を脱構築しようという意図が感じられる。

全体的に伝記的事実と間テキスト性について論じており、Godwin、Percy Shelleyの章では、人間関係とそれぞれの作家同士のテキストの影響関係を紹介している。Wollstonecraftに関しては、テキスト間の影響についてゴシック小説の系譜を含んで論を展開している。Byronに関してはパーシー・シェリーと

の比較からドイツ・ロマン主義作家との関連、Sigmund Freudの不気味なものへの考察と多岐にわたり読み応えがあった。Polidoriに関しては伝記的な情報に加え、近代恐怖映画の想像力の源としての *Vampyre* と *Frankenstein* という視点が持ち込まれている。

第二部のあとがきはFelmanのものであるが、その前半部分でMary Shelleyのロマン派時代における周縁性がJohnsonを強く引き付けたのだと分析している。それは承認を求める他者の声を内包しており、有名な幽霊譚創作競争において抑圧する者と抑圧される者の語りの競合の中に生まれた女性作家のテキストが、潜在的欲望の解釈に適していたことを説明している。Mary Shelleyの生涯は、書くことが女性にもたらす相矛盾した欲望を解釈しようとしたJohnsonの生涯と重ね合わせられ、二人の人生は循環する物語のように提示されている。後半部分ではJohnsonが死に際で見せた凄まじい書くことへの執着を生々しく描き、書くこと自体が生きること、もしくは個人の生を超えて残される生涯であるという意味で、死との戦いにおける勝利ととらえ、Johnsonの功績を称えている。

難病により閉じられたJohnsonの生涯と思想をMary Shelley研究という観点から一つの大きな枠組みの中でとらえ直そうとする書物であり、80年代以降のフェミニズム批評を今日の精神分析理論やジェンダー理論という観点から再考する有意義な内容であるといえる。